九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

狩野派《放鷹狩猟絵巻》西園寺家蔵

水野, 裕史
筑波大学芸術系 : 助教

https://doi.org/10.15017/2236362

出版情報：鷹・鷹場・環境研究. 3, pp.109-114, 2019-03-22. Faculty of Arts and Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

<資料紹介>

狩野派《放鷹狩猟絵巻》西園寺家蔵

The Picture Scrolls of Falconry by Kano School in Saionji Family

水野　裕史
MIZUNO, Yuji

はじめに

本稿は、学習院大学史料館に収蔵されている西園寺文書の《放鷹狩猟絵巻》（挿図１・２・３、以下西園寺家本）を紹介するものである[1]。

西園寺家本のような鷹狩を主題とする絵画の嚆矢としては、中世末期に制作されたと考えられる「野行幸絵」がある。この作品は現存していないが、江戸時代後期に制作された《野行幸図》（宮内庁書陵部蔵）などによって、その図様をある程度復元することができる[2]。野行幸とは、平安時代の天皇がおこなった鷹狩行事であり[3]、作品には天皇が乗る鳳輦や公家風の描写が認められる。江戸時代に描かれた複数の鷹狩絵巻には、天皇や公家たちの鷹狩を描いたものがあり、中世末期に制作された「野行幸絵」の影響を推測できる[4]。その一方で、武家の鷹狩を描いた作品も数多く見出すことができる。代表作例としては、伝雲谷等顔筆《花見鷹狩図屏風》（ＭＯＡ美術館蔵）がある。人物たちは、帯刀し、鷹匠なども月代の姿で描出されている。西園寺家本は、このような武家の鷹狩を主題としている作品と考えられる。月代の姿、

図１　狩野派《放鷹狩猟絵巻》上巻　西園寺公友氏寄託　学習院大学史料館収蔵

図２　狩野派《放鷹狩猟絵巻》中巻　西園寺公友氏寄託　学習院大学史料館収蔵

図３　狩野派《放鷹狩猟絵巻》下巻　西園寺公友氏寄託　学習院大学史料館収蔵

帯刀した人物たち、服装表現や鷹狩の獲物などから、高い身分の武家の鷹狩を描いたものと推測できる。加えて、金泥が多用され、季節感溢れる極彩色に彩られた絵巻物で、その様式から狩野派の絵師による制作と考えられる。本稿では、未紹介であった西園寺家本を概観し、類本と比較することで、その史的位置について考えてみたい。

１　作品概要

まずは、作品の基本情報を列記しておこう[5]。

作品名：放鷹狩猟絵巻
作者：狩野派
材質形状：紙本著色　全３巻

制作年代：江戸時代（18 世紀）
法量：縦 35.4cm、横 702.0cm(上巻)
縦 35.1cm、横 703.1cm(中巻)
縦 35.2cm、横 698.0cm(下巻)

上巻は、鷹狩に向かう行列と鷹狩、中巻は、鹿狩や猪狩、下巻は、饗応の場面となっている。

上巻から詳細を見ていこう。鷹狩に向かう行列から始まる。行列の中心には、黒馬に騎乗する月代の人物(挿図 4)。口唇には朱が塗り込まれている。衣文線は、朱の線上に墨線で二重に引かれている。鞍覆いには、虎皮が用いられる。手綱を見ると、馬側は紫に塗られているが、手元は白で描かれている。手綱を握る手には、滲みが生じている。行列の末尾には、若鷹と成鷹を据える鷹匠が表される。先頭には、一際大きい鷹を据えた鷹匠が見出せる。白い犬と茶の犬を連れた犬飼も描かれている。一行の上には、行列を眺める庶民たち。行列の先には、桜などの色とりどりの花が咲き誇り、春の情景を感じさせる。第 6 紙には、田んぼにいる真鶴（挿図 5)を狙う鷹と鷹匠が描かれている。作品全体を通じて、真鶴が頻出するため、本図にとって、真鶴が重要な獲物であったものと考えられる。

次いで中巻。上巻と同じく狩猟に向かう行列から始める。行列の周囲には、秋を感じさせる紅葉が描かれている。第 2 紙には、勢子太鼓を持つ人物。その先には樹叢に潜む人たちが描かれている。樹木の大きさは、人の大きさに対して小さく描かれる(挿図 6)。次に弓矢で鹿を狙う人物。人と鹿の間には、滝と河が表されている。第 4 紙には、鹿や猪、兎を追いかけ回す人たち。第 5 紙には、巨大な猪らしき獣を遠くから鉄砲で狙う人物も見出せる。第 6 紙と 7 紙は、捕獲した獲物を持ち帰る場面が表されている。

下巻にも、紅葉が描かれている。本図は、田にいる鴨とそれを狙う鷹匠から始める。次いで池にいる水鳥と鷹。第 3 紙には、捕らえた鴨と鷺を持ち帰る人物。第 4 紙には、馬とともに寛ぐ人たち

図 4　西園寺家本　上巻第 2 紙　部分

図 5　西園寺家本　上巻第 6 紙　部分

図 6　西園寺家本　中巻第 2 紙　部分

図 7　西園寺家本　下巻第 4 紙　部分

が、描かれる(挿図 7)。第 5 紙には、鷹を長い架台に留まらせている描写がある(挿図 8)。第 6 紙では、「御膳所」と呼ばれる狩場付近の寺院や有力農家での饗応の場面が描出される。魚を調理する場面から始まり、それを食する様子と続く。鯉らしい魚やゴボウ、鍋物を作るところも見受けられる。縁側には、手桶に色とりどりの花が生けられ、傍らの桶には金属製のような瓶も置かれている。最も左に描かれた人物は、上巻でも登場した本図の主人公のような武士であろう(挿図 9)。その背後には、真鶴が吊り下げられている。この饗応の場面では、人物たちは笑みを浮かべている。口元を見れば、朱が点じられ、明るい宴会の様が描出されていると言えよう。本図は、池で水鳥たちが遊ぶ様で終わりを迎える。

最後に人物表現から本図の制作年代について考えてみたい。本図の人物は、眉尻や目尻が「八」字に見える表現が特徴的である。月代の頭部は、均一な丸みを帯びており、殆どの人物が同じ表現で描かれている。剃り上げられた後頭部は、薄い青で表現されている(挿図 10)。この「八」字の表現は、戯画的とも言え、久隅守景筆《鷹狩図屏風》(日東紡績株式会社蔵)に見られるような守景の表現に顔貌表現に近い[6]。ただ、守景の人物描写は、顔の輪郭線に凹凸があり、個々の人物に個性を見出そうとしている。西園寺家本の人物たちは、形式化されており、殆どの人物が同じ表情で描出されている。

このような形式化が進んだ表現などから、守景以降の 18 世紀の狩野派によって制作されたものと考えてみたい。なお、下巻第 4 紙の馬の側で寛ぐ人物たちの描写は、守景の《鷹狩図屏風》にも見出すことができる(挿図 11)。このモチーフは、鷹狩図の一形式として流布していたのであろう。

2　諸本との比較

本図と類似する作品として、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵の《鷹狩絵巻》全 3 巻(以下、埼玉

図 8　西園寺家本　下巻第 5 紙　部分

図 9　西園寺家本　下巻第 6 紙　部分

図 10　西園寺家本　下巻第 6 紙　部分

図 11　久隅守景筆《鷹狩図屏風》部分
日東紡績株式会社蔵

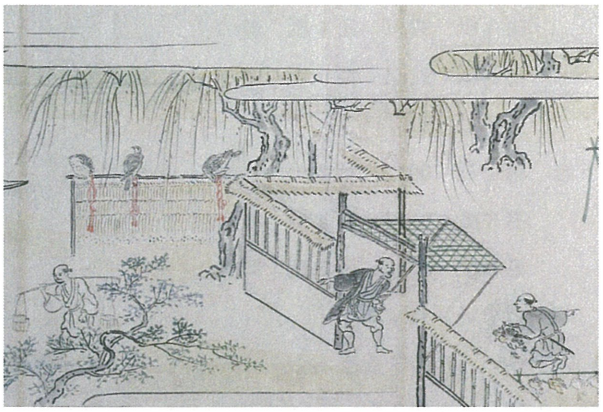

図 12　《鷹狩絵巻》下巻　部分
埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵

歴博本)をあげる。本図は、文化年間(1804-1818)の制作とされ、狩野派による作品と考えられている[7]。上巻は鷹狩行列、中巻は川猟と鷹狩、下巻は饗応の場面が描かれる。制作時期が異なるものの、西園寺家本と構成を同じくする。澤村怜薫氏が、鷹狩絵巻の典型例と示すように、このような構成が狩野派内で受け継がれていたものと考えられる[8]。細部を見ていくと、西園寺家本とモチーフまで近似することが理解できる。例えば、西園寺家本の下巻第 5 紙(挿図 8)には、上に突き上げられた「揚げ簾戸」が看取され、埼玉歴博本の下巻に見られるモチーフや構図と近似する(挿図 12)。次の饗応の場面では、魚を焙る様子や人物の配置、衝立の傍らで鍋物をつつく様などが、酷似する(挿図 13・14)。したがって、この二つの作品は、同系統の絵巻物と指摘できるだろう。ただし、西園寺家本に特徴的な「真鶴」は、埼玉歴博本には見出せない。同じ系統の絵巻とすれば、西園寺家に頻出する「真鶴」は、何らかの意味を有するモチーフであったことが示唆できる。なお、久隅守景の《鷹狩図屏風》を模写した加賀藩御用絵師の梅田九栄も《鷹狩図絵巻》(前田育徳会蔵)を制作している[9]。やはり、同じ武士の狩猟を主題とする三巻構成となっており、この構成が規範となって流布していたことをうかがわせる[10]。

最後に、武士の鷹狩を描写した三巻構成の絵巻の意味について、若干の私見を述べておきたい。西園寺家本の中巻は、兎や猪、鹿などの狩猟を主題としているが、これは武士たちが鉄砲や弓矢で捕獲したものであり、鷹狩で捕ったものではない。これは、武士の狩猟の象徴として挿入されたものと考えられる。その源泉の一つとしては、源頼朝の「富士の巻狩」のイメージがあった可能性がある。鎌倉時代の軍記物『曽我物語』にも記されるように、頼朝に向かう猪を退治する場面が夙に有名であろう。これを絵画化した幾つかの「曽我物語図」には、共通するモチーフとして「狩を眺める頼朝」がある[11]。西園寺家本中巻第 1 紙には、

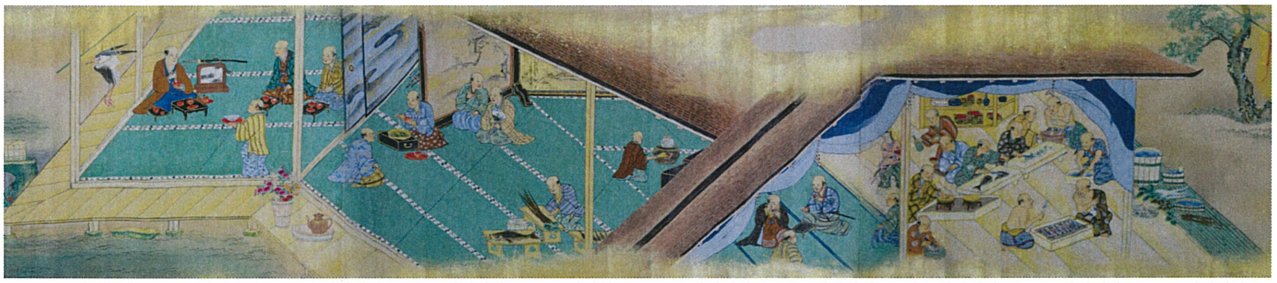

図 13　西園寺家本　下巻第 5・6 紙　部分

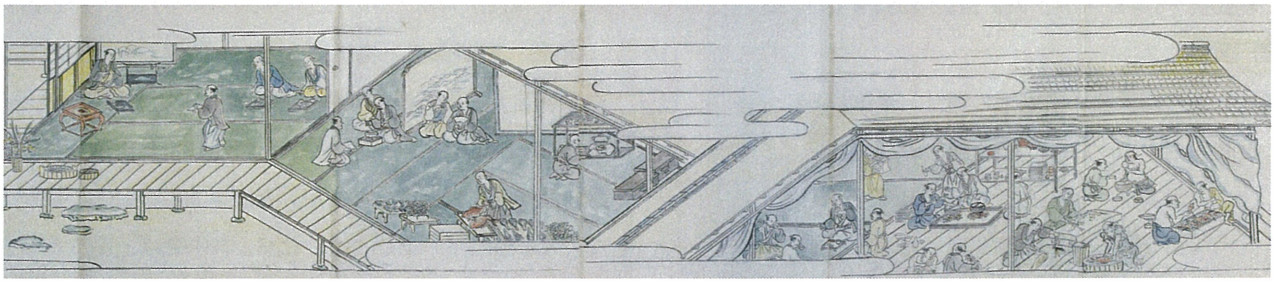

図 14　埼玉歴博本　下巻　部分

狩りを眺める武士の一行が描かれ、「曽我物語図」からの転用を認めることができる。加えて、天正19 年(1591)の豊臣秀吉による尾張や美濃での大鷹野のイメージもあったものと考えられる。この大鷹野では、鳥の他にも狐や狸、兎や猪などが捕獲された[12]。加えて、遅くとも 17 世紀後半には絵巻物として制作されたことが判明している[13]。「野行幸図」のような公家たちの鷹狩図には、兎や猪などの獣は描かれることはない。獣たちは、武士の鷹狩図に限定して描写される。これらのことから、頼朝「富士の巻狩」や秀吉「大鷹野」のイメージから、武士の鷹狩のシンボルとして獣たちが絵巻に採用されたと指摘できるだろう。

おわりに

本絵巻は、豪華な金泥に上質な絵の具が用いられた 18 世紀の優品である。鷹狩絵巻の構成について、「鷹場へ赴く行列の図、狩猟の図、そして獲物を食す図の三つの構図」を基本として指摘されているように[14]、鷹狩の絵巻には定型化を認めることができる。西園寺家本は、この構成の初発の一例として、また、その豊かな表現から鷹狩図の代表作例として位置づけることができるだろう。

註

(1) 以下の文献を参照。『西園寺家文書』(学習院大学史料館所蔵史料目録 15)学習院大学史料館、1998 年。

(2) 拙稿「宮内庁書陵部蔵「鷹狩図」と復古大和絵」『熊本大学教育学部紀要』63、2014 年。

(3) 榎村寛之「野行幸の成立―古代王権儀礼としての狩猟の変質―」『ヒストリア』141、1993 年。

(4) 前掲註 2。

(5) 各紙片の大きさは以下の通り。単位は cm。

上巻　第 1 紙　92.3　第 2 紙　92.4
　　第 3 紙　93.0　第 4 紙　91.7
　　第 5 紙　92.2　第 6 紙　91.7
　　第 7 紙　89.2
中巻　第 1 紙　92.0　第 2 紙　92.5
　　第 3 紙　92.1　第 4 紙　91.1
　　第 5 紙　91.4　第 6 紙　91.5
　　第 7 紙　91.2
下巻　第 1 紙　90.4　第 2 紙　91.4
　　第 3 紙　91.7　第 4 紙　92.3
　　第 5 紙　91.7　第 6 紙　91.4
　　第 7 紙　88.7

(6) 内山淳一「久隅守景筆「鷹狩図屏風」について―加賀藩との関わりを中心に―」『美術史』181、2016 年。

(7) 澤村怜薫「作品解説 16 鷹狩図巻」『鷹狩と忍城』(展覧会図録)行田市郷土博物館、2018 年、16 頁。

(8) 澤村怜薫「作品解説 17 鷹狩図巻」前掲 7、18 頁。

(9) 拙稿「日本における鷹図・鷹狩図の研究概要と展望―中国の鷹図を踏まえて」『鷹・鷹場・環境研究』1、2017 年、56 頁。

(10) 埼玉歴博本の中巻に見られる延縄漁の様子は、梅田九栄筆《鷹狩図絵巻》中巻にも見出すことができる。

(11) 井澤英理子「曽我物語図考――双屏風の成立について―」『日本美術襍稿』(佐々木剛三先生古稀記念論文集)明徳出版社、1998 年。

(12) 福田千鶴「豊臣政権期における鷹と鷹狩の位相」『織豊期研究』20、2018 年。

(13) 拙稿「狩野永納筆《秀吉鷹狩絵巻》下絵と勧修寺家」『デアルテ』33、2017 年。

(14) 前掲 8。

〔図版典拠〕

図 1-10・13　筆者撮影。

図 11　『逆境の絵師　久隅守景』(展覧会図録)サントリー美術館、2015 年、114 頁。

図 12・14　埼玉県立歴史と民俗の博物館ご提供。

〔謝辞〕　資料調査と掲載にあたり、西園寺公友様ならびに学習院大学史料館の皆様に多大なご配慮を賜りました。また、埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員の佐藤香里氏にも作品掲載に際して、ご高配いただきました。ここに記して、深く感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS 科研費 JP16H01946 の研究助成を受けたものです。